タイ国境 難民の祈り

ミャンマー流血から5カ月

僧侶を中心にした約10万人のデモを軍事政権が武力鎮圧したミャンマーの旧首都ヤンゴンでの流血事態から5カ月が過ぎた。軍事政権はデモに参加した僧侶や市民ら3000人以上を拘束し、首謀者には長期投獄を科す構えだ。治安当局に追われ、国境を越えてタイに逃れてきた僧侶や市民は100人を超える。祖国を離れ、難民となった彼らが、当時の体験と今の思いを語った。

【タイ北西部メソトで藤田悟、写真も】

僧侶たちが滞在するタイ寺院の一角にはビルマ様式の仏塔パゴダの建設が進んでいる＝メソトで

僧侶ら「国民困窮している」

アシンナナカンダさん

シャンシーラナンダさん

僧侶を中心にした約10万人のデモを軍事政権が武力鎮圧したミャンマーの旧首都ヤンゴンでの流血事態から5カ月が過ぎた。軍事政権はデモに参加した僧侶や市民ら3000人以上を拘束し、首謀者には長期投獄を科す構えだ。治安当局に追われ、国境を越えてタイに逃れてきた僧侶や市民は100人を超える。祖国を離れ、難民となった彼らが、当時の体験と今の思いを語った。

【タイ北西部メソトで藤田悟、写真も】

川を挟みミャンマーと接する国境の町、メソト。この町には、これまでにも軍などとの戦闘や迫害から逃れて来た多くのミャンマー人が暮らす。町の人口の約半分は、ロンジー（ビルマ式の巻きスカート）を身につけたミャンマー人で、タイらしからぬ光景を描き出している。

街はずれにあるタイ式僧院を訪ねた。僧院の奥に高床式の住居があり、黄色い僧衣をまとった10人のミャンマー人僧侶がいた。デモに参加して治安当局に追われた彼らは、この地に逃れ、僧院にかくまわれていた。

僧院で暮らすシャンシーラナンダさん(28)は「僧侶は人々の喜捨で暮らしているので、市民の生活が苦しくなっていることが手に取るように分かった。デモは、人々の暮らしを良くしたいと願う僧侶たちの自然な行動だった」と話し始めた。

ヤンゴンで僧侶のデモが始まったのは9月18日。燃料費の大幅値上げに抗議し、お経を唱えながら行進した。26日、治安当局がデモ隊の鎮圧を始めたという情報が伝わってきた。シャンシーラナンダさんは、若い僧侶約20人を連れ街頭に飛び出し、逃げてきた僧侶たちが再び組んだデモ隊に加わった。

そして、パゴダ（仏塔）前の集会で「政府はわれわれの要求に何も応えていない。もし私が捕まったらその後を継いでほしい」と訴えた。

「僧侶の皆さんは反政府的な行動をしないように」。集会の監視を続けていた治安当局の車が、こうスピーカーで警告した。

その夜、近くの僧院が軍に襲撃され、多数の僧侶が拘束されたという情報が流れた。昼間の出来事を僧院長に報告すると「君もマークされているだろう。逃げた方がいい」と忠告された。自分が追われていることを知り、国外脱出を決めた。メソトに到着したのは約1カ月半後の11月6日だった。

「僧侶は信徒がいてこそ暮らしていける。信徒と切り離された生活は精神的に苦しい」とシャンシーラナンダさん。「民主主義がもたらされれば帰国し、傷つけられた仏教を立て直す」ことが夢だ。

アシンナナカンダさん(33)は、今回のデモが大規模に膨れ上がるきっかけを作った地下組織「全ビルマ僧侶連盟」の活動に参加していた。

同連盟は、亡命ミャンマー人がメソトで結成した民主化学習会に参加、再びミャンマーに戻った僧侶を中心に結成された。

言論の自由がないミャンマーでは、国民にメッセージを伝えるのは極めて難しい。同連盟は、外国メディアに声明を送り、ビルマ語の国際ラジオ放送で、その声明を届ける戦術を使った。「外国メディアに声明を伝えていたのは私でした」とアシンナナカンダさんは明かした。

だが、活動が治安当局に漏れ、彼は賞金付きで指名手配された。地方でしばらく逃避生活を送り、12月にメソトへ逃れた。

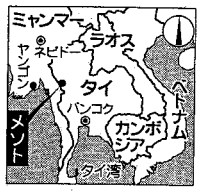
僧院の裏手では、ビルマ様式のパゴダの建設が進んでいた。「平和のパゴダ」と名付けられ、祖国の民主化と安寧を望む彼らの祈りが込められている。

メソト

民主化拠点

ミャンマーで88年に起きた大規模デモ・ゼネストを軍が弾圧して多数の死傷者が出た事件を機に、メソトには、デモに参加した学生活動家らが迫害を恐れて逃れてきた。

また、隣接するミャンマーのカイン（カレン）州は、最大の反政府武装組織「カレン民族同盟」（KNU）の拠点。軍との戦闘が続き、多数のカレン族住民が難民として逃れている。



メソトには、アウンサンスーチー書記長率いるミャンマーの最大野党「国民民主連盟」（NLD）の支部が置かれているほか、元学生活動家らで作る民主化団体も数多くある。タイに住むミャンマー人たちの民主化運動の一つの拠点となっている。人口は10万6000人（2000年）。

夫とデモ参加の女医

「政府は本性現した」

「ビルマ人たちは今も苦しみ続けている」と訴えるサバイさん＝メソトで

サバイさん(32)＝仮名＝はヤンゴンの診療所でエイズ患者を診る女医だった。デモ参加で治安当局に追われ、10月23日にメソトへ逃れてきた。

学生時代の96年、ヤンゴンなどで盛り上がった反政府学生デモに参加したことがある。サバイさんは「二度と政治活動に参加しない」という誓約書と引き換えに学生の資格を取り戻した。

以来、政治的な活動にはかかわらなかった。だが、昨年9月、僧侶が立ち上がるのを見て血が沸き立った。「今こそ状況を変えるチャンスかもしれない」

デモに参加しようと休職を願い出たが、人手不足を理由に断られた。だが、治安当局がデモ鎮圧に乗りだし、いてもたってもいられなくなり、夫とともに街頭に出た。

中心部のスーレーパゴダ近くに多くの人々が集まって叫んでいた。「軍は僧侶を殺すな。国民を殺すな」

間もなく兵士を乗せたトラックが着いた。降りてきた兵士たちは発砲を始めた。「恐れるな。威嚇発砲だ」と誰かが叫んだが、どうすることもできなかった。

月が明けて診療所の仕事に戻った。自分が拘束の対象になることはないと思ったからだ。

しかし数日後、知人が「逃げろ」とささやいてくれた。国外に逃れようと決意し、夫とともに国境を越えた。

「僧侶や国民に銃を向けたことで、政府は本性を現した」とサバイさんは声を震わせた。「弾圧された」とはいえ、私たちの行動が無意味だったとは思わない。現実を世界中の人たちに知らせたのだから」

銃口を人々に向けていた。パニックに陥り、サバイさんも折り重なるように倒れた。体を踏みつけられた。夫に助け起こされ、逃げた。血を流して倒れている人も目にしたが、どうすることもできなかった。